

ウッドバッジ研修所ベンチャー課程静岡第9期参加報告

横浜96団カブ隊隊長 中川和之

静岡県長泉町の桃沢少年自然の家で、5月2日から6日まで開かれたウッドバッジ研修所ベンチャー課程静岡第9期（所長・川島一郎リーダートレーナー）に参加しましたので、研修内容を報告します。



【開催場所】 桃沢少年自然の家

<http://japan.nagaizumi.org/momozawa/index.html>

長泉町の桃沢少年自然の家は、三島駅からバスで40分、東名の沼津インターから車で分の場所にある。愛鷹山のすそ野の桃沢川の河畔に展開する青少年活動施設である。三島までは、大船から直通の電車もあり、電車とバスで行動することもできる。

地元長泉町と清水町の両町による組合立で、地元の子どもたちは、幼稚園や小学校から使う施設とのことだが、宿舎は食事付きで、落ち着いた雰囲気スペースも確保できるキャンプサイトはボーイ活動向き。費用も安く、地元のボーイもよく使っているとのこと。水のプログラムもいろいろできそう。

申し込みは町内が1月から、町外が2月からで、事前の指定日に現地で調整会議が行われるが、けっこう混んでいるという。

ハイキングは、最もハードな愛鷹山の縦走からビーバークラスまで、いろんなコースが取れそう。キャンプサイト周辺では、沢登りのようなこともできそうな場所。

【参加人数】

今回の参加人数は、全部で19人で、県外からは長野2人、神奈川2人、埼玉1人。6人の班が2つと7人の班が1つで、女性は2人。

所員は13人。ちなみに静岡県連は、同日日程で浜松周辺でBVS課程のWBを、2・5日の日程でCS課程を同時開催していた。食堂があるためか、QM以下の開所スタッフが少なく、少し大変そうだった。

【全般的な感想】

98年にCS課程、99年にBS課程、03年にCSの実修所に参加し、定型のWB研修としては4回目だったが、VS課程の印象は、全体的には実修所に近いと感じた。これは、他の実修所経験者も同様の印象を持っていた。

VS課程の研修所は、スカウト対してプロジェクトの課題を見つけ、それを形にする＝解決するという手法の一端を知るのが目的だが、それが日ごろからの課題解決の場である実修所に近い印象を与えるのであろう。

今後、私自身がVS課程の指導者になるかどうかは分からないが、VSの活動には、CS、BS時代からの積み重ねが重要になることを実感した。

スカウトに対しては、上進というステップを大きく見せて、より知的好奇心をかき立て、難しい課題に意欲的に取り組んで欲しいが、知的作業が入り出すCS課程から指導体系としては一体的に取り組まないと、VS活動だけで成立するものではないということだ。

3泊4日の生活面は、ボーイスカウト型式のキャンプを行ったが、VS課程に参加する指導者はベテランかスカウト上がりの若者が多く、充実したキャンプ生活ができた。指導者になったら、何年かに1度は、WBキャンプに行きたくなるという話を聞いたことがある。5年ぶりの参加で、その言葉を実感した。

【写真】

http://gallery.mac.com/nkaz_pb#100183

【1日目】

午前6時4分の静岡行き各駅で、三島まで。ムーンライトながらの帰りの車両なので特急型だが、遠距離でいい車両なので大荷物を持って乗るのも大変なほど混んでいた。三島まで1時間20分足らず立ち続け。三島駅で少し時間があつたので、駅そばを食べて午前7時40分に桃沢郷行きのバスに。浜松北高の山岳部10数人が、揃いのジャージ姿で乗り込む以外は私だけ。途中で地元の人が2、3人乗り降りしたが、浜北の高校生がいなければがら。40分で桃沢郷に到着。舗装道路を500mほど上がると、制服姿の人が待ち受けていた。受け付け開始は9時15分ということだったが、既に何人かの参加者が来ていた。たぶん、私以外は全員車で参加していた。駐車場も広い。

受付前に、施設内の状況を携帯のカメラで撮影。桃沢川が、愛鷹山のたくさんの沢でできた百沢川が転じた名前だという解説もあった。危険が少ないBVSクラスの川のパログラムもできそうだと確認。前夜の雨も上がっており、設営には問題なさそう。

受付が始まり、参加費を払い、名札を受け取り、キツツキ班だと分かる。時間前にそろっていたので、各班、年齢順にならび、研修が始まる。各班ごとに、ブルーシートの上で、荷物の自己点検。11年前には、一つずつ出してチェックしたが、完全に自己点検。ダッフルバッグに適当に入れてきたので、どこに何が入っているか分からず、中身をごそごそやっていると、所員から「あんまり厳密にやらなくていいですよ」というささやき。

荷物を背負って、道路の反対側の林の中に入る。全員がかろうじて集まれる場所で、所長から「これから4日間は世俗を忘れて研修に参加できますね」と決意を問われ、研修のための静岡県連のチーフを授与されて、林の中に設けられた道心門をくぐってキャンプサイトに。「桃沢広場」と名付けた広場の奥にあるドームテントサイト（のためのコンクリの丸い台）に、班ごとに荷物を置き、広場でセレモニーと記念写真。

§ 1 ウッドバッジ研修所について 10:30～

そのまま野外炊事場で、最初のセッション。講師は川島所長。所員の紹介。VSの隊長は、インストラクターの活用がポイント。すべての部門の指導者は、BS1級の技能が求められる。静岡県連は、すべての部門のWBでボーイスカウト方式のキャンプで行う。

〔自己評価〕研修所のプログラムが、なぜ、どのように変化してきたのかをもう少し知りたかった。

その場で昼食を食べて、施設内見学をして、班の役割分担を決めていたら、指示された時間（予定時間の15分前倒し）を忘れ、所員に指摘されてあわてて施設に向かうはめに。

§ 2 スカウト運動の基本原則 13:00～

スカウトの自己学習を指導者が支援し、自己学習によってスカウトが成長するのを支援するのがスカウト活動。自分への務め、他人への務め、神への務めの3つのちかいは世界共通の理念。（日本のちかいは、神、他者、自分の順）。徳とは「他人の幸福を図ること」（中村知のちーやん夜話集）。「名誉にかけて」みんなの前で自分自身に誓う。

個人作業として、日常生活の中で、おきてをどう実践しているかを書き出した。

「スカウト運動は背中教育」。指導者の実践が問われる。（中川＝この実践がただやればいいという実践ではない。その質をスカウトはきちんと見極めている）。

スカウティングの小集団活動は、VS年代ではそのときどきでグループを組む。目標を与えるための進歩制度としてのベンチャー章、富士章、宗教章（進行奨励章）、アワード、技能章。野外活動は、自分の力ではどうにもならない自然の中で信仰につながる体験を得られる。

スカウティングの7つの教育手段、ちかいとおきての実践、行うことによって学ぶ＝実践。小集団活動＝班制度。段階的で魅力的なプログラム＝進歩制度。自然と野外での活動。成人の支援。チーフや制服など象徴的枠組みの活用。



ユニセフが認めた、5つの国際的ノンフォーマル教育の一つ。

〔自己評価〕 その年代ごとに「ちかい」の意味を深めて再確認をするというのはよく分かった。

●設営 15:30～

予定より15分程度早く設営を開始。初日の食事当番になったため、着替えと資材運び、水運びが終わった後、テントサイト作りは任せて、森田君と2人で調理に。食材配給を受け取るのが一番遅く、班担当も心配していたが、役割分担をして進める。当初は、一番奥がテントサイトで、手前にリビングダイニングという設計だったが、風向きを考えて変更。結果的に、水回りは側溝を有効に使ってできた。食卓は、コンパネに枠をして、折りたたみ式の足で支えるテーブルが支給されたので、持ってきた椅子とで最低限の場は確保できた。

キツツキ班は、スカウト経験者が私を入れて4人、最年長の山崎班長は自衛隊OBでBS隊長歴20年、班長と同じ年の勝谷さんはスカウト指導者歴は短いが小学校理科教師とあって、山崎班長の指示の元に、適当に分担して作業がどんどん進む。岩佐君のフォローシップが素晴らしい。テントは、喫煙者3人と、非喫煙者3人で分かれることに。

立ちかまどの作成は義務だが、配給品にガスバーナーがあり、自分で持ってきていれば使うことは黙認するとのことで、バーナーでの調理に。カレーとご飯。ご飯は6人で4合。少し物足りなかったが、きれいになくなったのでちょうど良い。手早く片付けて、鍋も洗って夜のセッションに。

§3 野外活動 19:15～

キャンプはスカウト活動最大の冒険である。(中川＝冒険的な要素がないキャンプでは意味がない？ 96団の一時のような月1キャンプでは冒険的でなくなってしまうか？)

野外活動の意義は、個人的能力の発達、本質的なものへの回帰、自然との調和、人類史的な感覚を持つ、自然の厳しさの体験で生活規律の価値の理解、生活を豊かにする手助けをする。VS年代は日常生活では自らを律することがある程度できるが、非日常的な自然に身を置くことで自己の能力の限界を知ると共に、成長への手がかりを得る。そのためには、これまでよりハードな自然体験が得策だが、身近な自然を寄り深く知ることによって日常の中の非日常に気付くこともできる。

VSのキャンプはより高度な野外活動であると同時に、スカウトと指導者の信頼関係を築く場(ボンファイヤなどで)。スキルの上達だけを目指すのではない。ボンファイヤーでの夜話とスカウトハウスの違いを認識する。信仰心、人間存在を越える何かを意識するのがスカウトハウス。

〔自己評価〕 VSのソロキャンプを、BSの班キャンプと違う場として与えるだけでなく、レベルの高い協力によるキャンプでスカウトに満足を与えることもできるのではないか。

〔1日を通じて発見した新たな学習テーマ〕

VSの個人としての成長の中に、レベルの高い協力関係の構築をどう進めさせるか。VSの隊活動のあり方につながると考える。レベルの高い「個」と「協」のあり方について、

この4日間で見出したい。

〔生活についての感想〕

やはり忙しいが、研修所、実修所で4回目であり、気分的気には楽である。前に出ないで引きながらの活動が出来ている。班の雰囲気はよい。

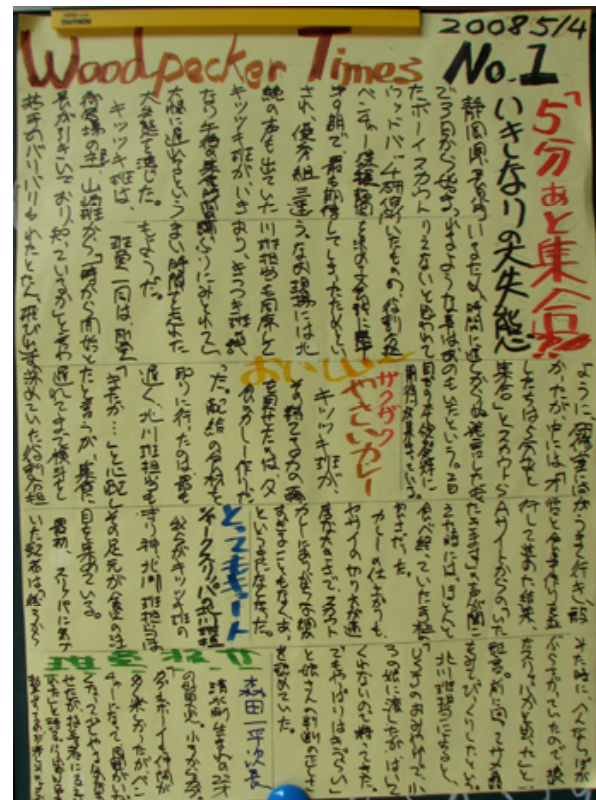
〔班担当コメント〕

役割分担ができているのでうまく回っていくと思います。若手をうまく使ってリードしていきましょう。

セッション後は、研修室で班長会議と並行して、自己評価シートに記入し、「今日の話題」で班担当と振り返り。

女性と交替で入浴し、22時過ぎにサイトに戻る。途中の川のそばで、桃沢川と愛鷹山、富士山と此花さくや姫の話でスカウトタウンを行った。

サイトでは、翌日の仕事などを確認し、夜の作業はせずに早めの就寝とした。テント内で岩佐さんと話をしながら「Woodpecker Times」の第1号を書いて、寝たのは12時過ぎだった。



【2日目】

午前4時半に起床。食事係として、昼食のちらし寿司のために米を炊き、パンと卵とハムとベーコンでトーストサンドを作る。6時に朝食を食べる。ハムとベーコンをマーガリンで炒めたが、胡椒をかける際にふたを取って振ってしまい、胡椒まるけになったが、あわてて拭き取るなどして、全体としてはパンに挟んで卵と一緒に食べたら「ピリ辛」の許容範囲内に(^_^;)。食事担当として、朝食後もちらし寿司をプラパックに詰めたり、洗ったり。その間に、しっかりした立ちかまどができあがり、ゴミを燃やしたりした。この時点では、立ちかまど、洗面台、班旗立て、掲示板に日程表や食事メニューに加え、「Woodpecker Times」という手書きの新聞を張り出し、午前8時の点検を待ち受けた。

実修所ではときどき見受けられる新聞だが、研修所ではそこまでやる人もないなかで、個人作業としてやったのだが、班のまとまりを作るのにも役立ち、朝の集会前に所員が入れ替わり立ち替わり、新聞を読みに来ていた。

午前8時からの点検講評では、野営工作の進捗が最も進んでいたことで、キツツキ班が優秀班となった。

朝礼は当番班が運営した。服装点検について解説があり、ホイッスルも首にかけるより、服装点検時はポケットの中がベターという。首にはチーフと2ビーズだけが基本という。

ゲームは、Pロープを長短とりまぜて切ったものを、ゲームのリーダーが持ち、参加者は班ごとに並んで、リーダーのところにかけていって1本引き、本結びをしてできるだけ長くつなげるといふゲームを行った。これは、すぐにできるスカウトスキルゲーム。(違う種類のヒモを用意して、本結びではなく一重つぎとかでやるといいかも)

§ 4 ベンチャースカウト年代の特性 9 : 0 0 ~

リーダーハンドブックなどに沿って解説。ベンチャー年代の特質として、不安定な状況にあるということを理解すること。ただ、何もかも許すと言うこととは違う。大人に対して「無責任、利己的、夢がない、自分の利害で動いている」などという厳しい目を持ち、「もっと理解して欲しい、尊重して欲しい、援助して欲しい」。「仲間意識があり、まじめに話を聞いてくれ、自分に考えさせてくれ、信頼してくれる大人がいい」という調査がある。(大阪連盟のシニア年代向けの本から)

現代社会におけるちかいとおきての実践という視点。スカウトのニーズの発見は重要であり、それが自分発見の引き金になる。ニーズ刺激が大切。(具体的なニーズをできるだけたくさん考えてみるためにどうするかがポイント)

ニーズの刺激法。(1) 彼らをあらゆる場所に引き出す (2) 他のグループのプログラムを知らせる (3) 社会と連携を促す (4) 選択肢を示す (5) 長所を見つけてほめてあげる。命令と統制から権限委譲へ。

「まず、一般的な少年について知り、それから(目の前の)特別な少年について知る」(B P ?)

・班ごとに、自分がベンチャー年代だとしたらという前提で、具体的なニーズをポストイットに書き出した。次に、そのニーズに対し、保護者ニーズ、社会のニーズ、スカウト運動のニーズを×体験させたくない、△どちらでもない、○体験して欲しい、◎ぜひ体験させたいに分類し、それぞれアワードの7つの分野のなにが該当するかを模造紙に整理した。〔自己評価〕ニーズをどう刺激するか、どう引き出すかがV S 活動のポイント。K J 法のようなワークショップで楽に自己発見させること！

§ 5 おきての指導 11 : 0 0 ~

おきての実践は(1) 社会人としての基本的モラルを習慣づける→鍛えた能力を社会のために役立てる→役立った充足感→さらにモラルを高める意欲や社会に役立ちたいという意欲を持つ。それが社会人としての資質を備えることにつながる。

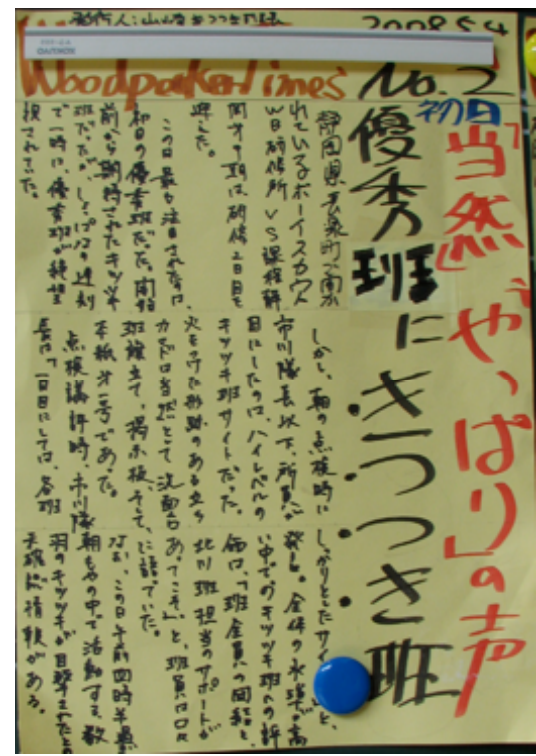
モラルを持つ=ちかいの「自分への務め」、社会に役立てる=ちかいの「他人への務め」。充実感があれば、不安や恐れ、苦しみを乗り越える支えになる。それが精神的な存在への意識に繋がり、信仰心にもつながっていく。

スカウトに、「自分に必要なもの、欠けているもの、補うもの、伸ばすもの」を見出させて認識させる。おきての実践で長所を伸ばし成長する。

・班ごとに、8つのおきてにあてはまる日常生活の行動を書き出した。

〔自己評価〕信仰心につながるためには、ある程度活動レベルと心をもたせる必要があると感じた。

昼食は、食堂に行って、朝に作ったちらし寿司を食べた。「夕刊



はないの？」との所員の期待に応え、半分のサイズで「Woodpecker Times」の夕刊を発行。文章の下書きをしておいて、岩佐君に書いてもらった。

§ 6 ベンチャー隊の進歩制度と隊の運営 12 : 45～

ソロキャンプ。自立へのプロセス、個になるプロセスとしてのソロキャンプにより、ベンチャー章。

富士章は、(1) ちかいとおきての実践と、事故の日常活動について隊長と話し合い、将来の生活についての抱負。(2) 3つのプロジェクト、(3) 野営章、炊事章、救急章を含む5つの技能章。宗教章(年度内にできる信仰奨励章)。昔は富士スカウトが最高峰。今はプロセス。さっさと取って7つの分野でプロジェクトを目指せ。

ベンチャー活動の目的。ちかいとおきての実践。自分で計画したプロジェクトの達成。事故の確率。身体的活動への挑戦。協調性とリーダーシップの要請、社会の一員、奉仕の精神、国際理解。

スカウトが活動チームを結成するのは、スカウトニーズで編成する。ただ、方よりの少ないメンバーが望ましい。プロジェクトは企画、計画、実施、評価のサイクルを回す。(中川=いわゆるPDCAサイクル)。グループプロジェクトでは、自分たち地の成長を仲間に分かち合うことが大切で、活動チームは自治のグループであり、その目的のために結成される。グループプロジェクトの中で個人プロジェクトが実施できる形は歓迎される。すべて個人だけでやることはあり得ないという。

〔自己評価〕グループプロジェクトと個人プロジェクトの違いについて、もう少し具体的に知りたい。どうしても個人プロジェクトのみになりがちなので。

§ 7 グループワーク 13 : 45～

(ワークショップなどのグループワーク手法の学習かと思ったが、VS年代は班がないので、VS年代的班制度としてのグループワークを学ぶセッション)。グループワークのメリットは、意見を集めやすい、参加感が高まる、複数でやるので支援も得られやすい、役割分担もでき活動の効率が上がる、互いに支え合える、経済的にも効率的、危険も回避できる。

グループが個人にもたらす良い影響として、所属意識を持て、メンバーとして目的に向かって自分の能力を提供して貢献でき、役割分担で、リーダーシップ、メンバーシップ、フレンドシップ、フォローシップを育て、社会性を養える。

〔自己評価〕グループを作るメリットはよく分かった。ワークショップ的手法が重要である。

§ 8 隊のプログラム 14 : 30～

スカウトにとって5年間のプログラムとなる。

プロジェクトの企画。ニーズを固めてもらい、目的で方向性を示し、目標で目的を達成する方法・手段を考える。活動チームを編成し、チーフやマネージャーを決定する。隊ではチーフは1つのグループでしかできないが、メンバーとしては参加できる。隊には議長を置く。

まず、隊会議でチームをスカウトと隊長が承認する。これでチームの存在が認められる。チームは、メンバーがそれぞれ、計画書と報告書を出す、部分的には同じ内容で問題はない。

企画書は、チーフ名、マネージャー名、メンバー名、何をするか、いつ頃やるか、予算はいくらかでOK。

V Sの隊集会は、プロジェクトを行う前の事前訓練として行われる。各グループで共通して必要な技能を向上させる。そのためにインストラクターもお願いする。プロジェクトの成功の鍵は、この隊集会にある。

5年間のプログラムプロセスで、スカウトの個人的な成長を同プログラムに取り入れるか。幅広い年齢層に対する配慮が必要であり、年長者のニーズにこだわらないように注意が必要。

プログラムプロセスのキーマンは議長。

〔自己評価〕 現実にV Sの活動を体験していないので、分からないところも多いが、概ね分かった。もう少し深く知りたい。

午後4時半から、夕食の準備。1時間半で食べて片付けて。炊事担当の2人に任せて、設営を続行。炊具置き場、門柱、スコップなどの資材置き場、薪割り場などを作っていく。食事はガスバーナーをさらに1つ出して3つでボークジンジャーとご飯、キャベツともやしの野菜スープ。

§ 9 ベンチャープロジェクト1 18:00～

セッションの目的は、プロジェクトの意義の理解と、企画立案ができること、評価ができること。評価とはスカウトの成長度合いを判定すること。対話をしておくことで、プロジェクトを終了した際に評価ができる。

自らの目標を自らが達成することで進歩となる。活動チームで、自主独立して展開する。

プロジェクトは自己表現の場であり、PDCAを回すことで目標を達成し、進歩が認定され、アワードとなる。

企画には明確な目的と目標が必要である。企画を具体化したのが計画書。計画に基づいて実行する。プロジェクトの振り返りをして、失敗だけでなく良いところも出し合う。

目的は、(1) どんなことを通じて＝内容、(2) 何をすることによって＝行動、(3) 何を達成することができ＝知識・技能、(4) それを活かして、今後どのようにしていきたいか＝展望－を書く。

目標とは、目的を達成するために、どんなことを行うのか、活動の内容を記入します。

指導者レベルで目的や目標を掲げてはいけない。

評価では、否定的な言葉は述べない。プロジェクトは短めにしてくり返していくことが大切。行動・事業に対して、指導者がどう支援ができるか。

・キッツキ班は、前夜のスカウトタウンで桃沢川の話をしたので、



関連することができないかという岩佐君の話から始まり、富士山を水源とする林田川と、愛鷹山を水源とする桃沢川の水の話をベースに、ニーズにあったスキー、スノボ、カヌー、富士登山などを盛り込んだ1年間の壮大な計画「プロジェクト富士山」を企画した。チームF U J Iとしてのグループプロジェクトと、スキーやカヌーなどは個人プロジェクトとして実施し、最後に富士登山をして成果を共有し合うという内容だった。

もともと開設側が、桃沢川の水探査というプログラムを用意していたため、原隊関係者を通じて岩佐君に「キツツキから水の調査を提案するように仕向けてくれ」という依頼があったことは、その後、岩佐君から開かされて、やや強引なもって行き方に納得がいった。

模擬隊会議の中では、3班のプロジェクト提案に共通するのが「水の調査」として、隊長が知り合いの技術者をインストラクターと呼んで、技術指導を隊集会で受けることとなり、明日、3班全員が行う模擬プロジェクトとして、桃沢川の水質調査を行うことになった。

〔一日を通じて発見した新たな学習テーマ〕 具体的なプログラム作成をやってみたくなった。

〔生活面〕 うまくいっている。

〔班担当所員〕 楽しい新聞をありがとうございます。さすがですね！ 学習面でもうまく導いてくれていて、ありがとうございます。

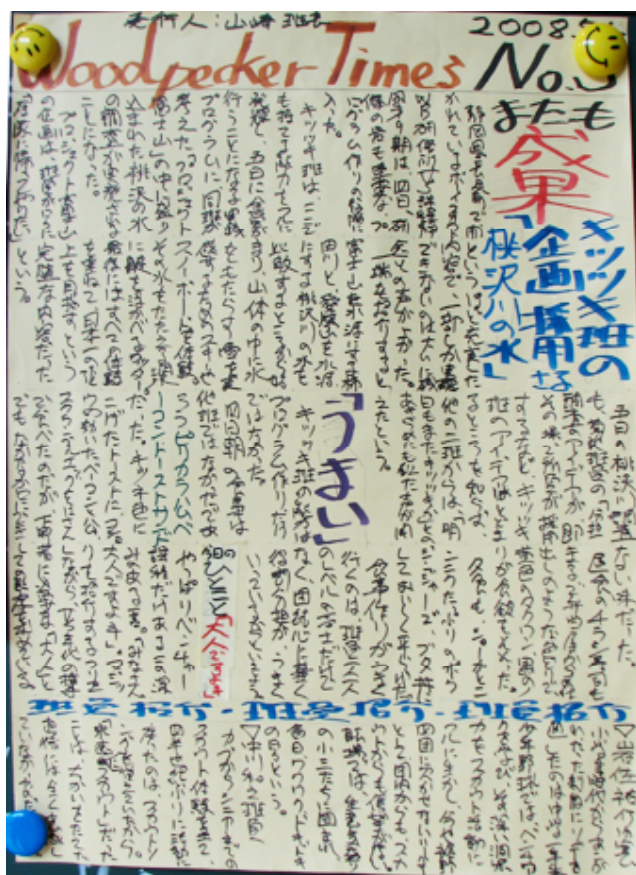
夜は、班担当所員がサイトを訪問。一抱えぐらいある太い薪に、チェーンソーで6方向に途中まで切れ目を入れ、着火剤を使って火を付けると、適当な風があると周囲や地面に負荷がかからないボンファイヤができる。「木こりのロウソク」。Webなどを見ると、4方向に切るのが多いようだが、6方向でも風が弱いと空気が入らず、なかなか火が上がらなかった。

話を聞きながら、表札を作る。所員が帰った後も、しばらくみんなで輪になって原隊の話をする。テントの中で、Times 3号を書く。

【3日目】

やはり4時半起きで設営を続ける。表札を付けて、道案内も。朝食はご飯とふりかけ、漬け物、梅干し、生ミソの1人分袋入り味噌汁。昼食のハイゼックス（ポリ袋で作るご飯）も作った。

点検講評では、フクロウ班が優秀班に。それもあってか、朝の集会後のゲーム「底なし沼」で燃えて、1位に。山崎班長らゲームの経験者がいたので、所員チームに競り勝ち。



〔ゲーム・底なし沼〕6 mロープを班で2つ用意し、それぞれ端を本結びにして輪にする。手前から向こう岸に、ロープの輪で島を作って渡っていく。いち早く渡った方が勝ち。

§ 9 ベンチャープロジェクト1の続き 9 : 00～

前日の模擬隊会議で承認されたということにした企画書が、「プロジェクト富士山」という名称で各班に渡され、そこから班ごとに計画書作りを行った。

〔自己評価〕大きなプロジェクトであれば、それを分割して、小さなプロジェクトとして繰り返しのPDCAサイクルを回して体験をさせることがポイントだと思う。

§ 10 安全教育 10 : 30～

VS年代は、自ら安全を求めるように仕向ける。スカウト活動では危険から遠ざかるのではなく、小さな危険の経験を積み重ねて、大きな危険に絶えられるようにする。すべての場面で安全対策が必要。

指導者は、スカウトの技量を知り、装備などの使用方法を指導し、保護者、団、地区の連携を密にし、計画書のチェックは入念に行う。スカウトは、自信過剰に陥らず、互いを信頼し、信頼にこたえる役割を果たす。そのために計画を早期に立案し、健康管理に努める。

B Pの言葉・実行によって学ぶ

子どもは何か知らしたがるものだ。だから、それを良い方向でやるように励まして、自分のやり方でやらせることである。そして、失敗をさせなさい。子どもが経験から学ぶのは失敗することによってである。少年自身がしなければならないことにあまり手出しをしないことだ。彼らがすることを見ていなさい。「自分が何かをしたい時は、自分でしないことである」というのは、ただしいモットーである。

〔自己評価〕最後のB Pの言葉で言う「失敗をさせる」ために、VSでは失敗を計画段階でチェックすることが重要だと感じた。

当番班交替。キツツキ班が当番班に。班サイトに戻って、隊集会のために制服を着て、昼食を持って帰ってくる。

§ 11 技能訓練（隊集会） 11 : 30～

VSは隊集会で、技能訓練ができる。自分の興味や関心に応じて、技能を身につけ、知識を深め、新たな自分を発見する。それによって、自分の生活だけでなく、他の人びとに役立ち、詳細の職業や趣味につながる。

大切なことは、いかに興味を持たせるか。熱中させる用に援助する。また、確実な技能の取得が安全も保証する。

基礎的な技能は、技能章。個々のプロジェクトに必要な技能は、幅広い分野で幅広く提供する。技能訓練は、スカウトの発意で行われることが望ましい。それを仕向けるのが隊長の手腕である。

・話のあと、こんぺいとうで隊集会を開催。地元の所長の団の団委員である水道局OBの人に、PhとCODの検査方法を教えていただく技能訓練を行った。セレモニーの司会を

担当した。司会の場所は、馬蹄形で中心に向かって左側、隊長のわきに並んだ。

〔自己評価〕 本職のインストラクターの持つ説得力が、スカウトをやる気にさせると感じた。

§ 12 ベンチャープロジェクト2ー1 13:30～

・出発準備をして、水質検査などに出発。途中のかじか橋まで全員で行き、そこから上流の水神社と下流の桃沢キャンプ場の水をフィルムケースに採取し、周囲の観察を行った。出発前に「ハイキングではなく、ベンチャープロジェクトである」という指示があり、観察事項もハイキングでの報告書と、



目標を達成するために必要な事項の観察との違いを意識させられた。途中、大きな砂防ダムやその下に整備された公園、降雨と立ち上る霧、富士山と思われる火山灰土やきれいな水だからそのワサビ田、火成岩、堆積岩（付加帯？）、さらに水神社（神社という名前の日蓮宗の教会）の由来書きに「水神竜王」とあったことなどを観察した。（写真参照）

15:40に戻った後、水質検査をし、報告書の作成を始めた。

夕食 17:30～18:30

食堂で、ゲストナイト。所長が編集した音楽付きの写真のスライドショーも見せていただく。フルーツポンチ（パンチ）を、3杯いただき、けっこういい気分に。

§ 12 ベンチャープロジェクト2ー1 18:30～19:30

報告書の作成と、報告書の発表。班としてのまとめの方針が整理されないまま、報告となり、勝谷さんと岩佐君の2人が発表した。水を取り巻く環境と自然、土石流や砂防ダムという環境全体について、勝谷さんがレポートし、岩佐君が水質検査から上流下流共にあまり差がないことなど、プロジェクト全体の押さえをした。グループプロジェクトが同じ報告ではなく、目的に向かって1人ずつ違う内容の報告書であってもよいということを感じた。岩佐君が、事故がなく実施できたということを報告したことは、安全の視点で良かったという評価があった。



隊長が聞きたいことが開いてあるのが報告書。評価反省は、先ず個人で作業をし、グループで共有してまとめてから隊で報告書を承認するという流れとなる。

評価は、スカウトによって異なる。自己の成長をどう自己評価したのか。個人として、グループとして、どのような成長を促したのか。そこから次のニーズが生まれたのか。プロジェクトの目的は達成されたか。評価と反省は分けること。隊長が一人一人に面接をし、計画書に忠実に実施することだけでなく、次に向けていくサイクルを考え、1回目より2

水神社は、水神竜王の御霊を祀る。水神は、水神竜王の御霊を祀る。水神は、水神竜王の御霊を祀る。

回目が良くなったと見えるような指導を。

グループだけでなく、個人発表を付け加えても良い。評価のポイントは、プロセスであり、成長の過程であること。

アワードは、メンバーから認められて認定される。

プロジェクトの書式は、静岡県連盟の Web サイトからダウンロードできる。

<http://www.bs-shizuoka.com/shiryu/form/vsp19.doc>

〔自己評価〕 P D C A サイクルをどう回すのか。やはり 1st プロジェクトの成功が大切だ。

§ 1 3 キャンプファイヤー 19 : 30 ~

・雨が降っていたのでこんぺいとうの屋根の下で営火。最初から火が付いた周りに、それぞれの椅子を置き、静かに座る。営火の祈りの歌、日にまつわる話、班のソング、ショートスピーチ、という流れで続く。キツツキは、山鳩の歌のあとに、森田君の 2 人の富士スカウトの話の予定だったが、富士スカウトの話にならず WB の感想で終わるが、全体としては厳かな感じのまま終わる。市川隊長と川島所長の夜話 2 題。あわせて 30 分程度。

営火には決まったパターンはないが、馬鹿騒ぎに終わらず、なごやかな時間に終わるべき。夜話はちかちかとおきての実践を示唆する話を。×ゲームや人を揶揄する話などは好ましくはない。

〔自己評価〕 短い時間でも、感動を与えることができることが分かった。

〔新たな学習テーマ〕 プログラムプロセスの中で、評価の持つ重要性和、そのために単騎のプロジェクトをどう取り組めるかがポイントだと感じた。

〔班担当コメント〕 一連の流れを理解され、今後の活動に役立ててください。十分理解されていると思います。



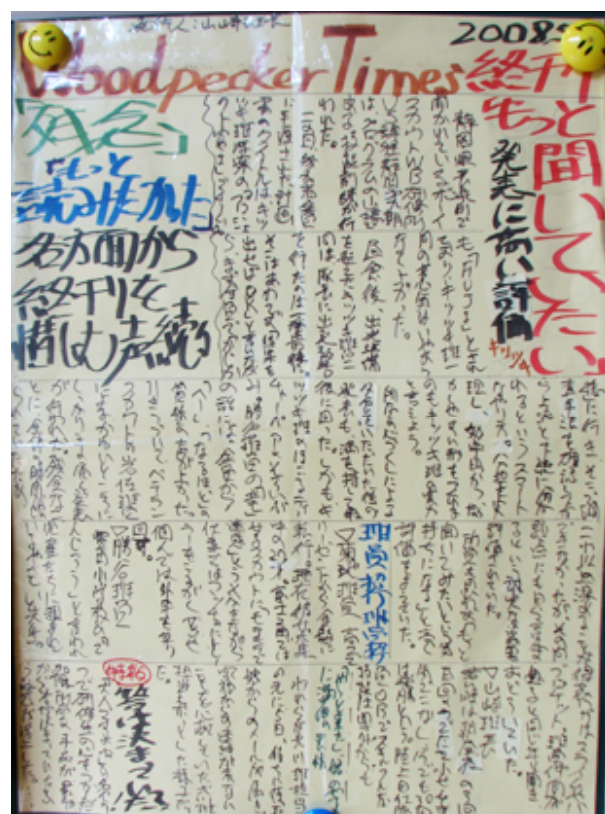
サイトでは、バーナーでお湯を沸かし、差し入れのみたらし団子などをいただきながら、交流を深める。雨は止んでいたが、林の中のキツツキサイトは、木々の葉から落ちてくる水で雨が続いているような感じ。翌朝の乾燥に不安が。眠り込みながら Times 最終号を書く。

【4日目】

5 時 10 分起床。まだ設営を続けながら、最後の朝食。カートンドッグのメニューだが、パンは網で焼いて食べる。ソーセージとキャベツ、スープ。看板を作ったり、すのこを作ったり、最後まで真剣に設営を続けてしまう。

当番班なので早めに行き、国旗の練習。点検講評で優秀組はカッコウ班。朝礼は当番班。ゲームは帽子リレーを提供。

撤営を考え、「指導者として」という隊長の指示で、フ



ライシートを日の当たる場所に移動して乾燥させる。

§ 14 安全管理 9:00～

(最初に、点検講評のためのチェックシートを渡される)。点検は、スカウトと指導者の人間関係における接触の場。スカウトの進歩を励ます場。野営技術のあら探しではない。点検のための点検ではない。安全対策計画書、チェックシート、緊急対策マニュアルなども渡される。

安全管理は、危険を予知して、具体的な行動を行う。なぜ、安全管理するのか、スカウト活動の目的の達成のために行う。

「事故は絶対に起こる」という前提で考える。プログラムに一つ作れと言われている。安全のための組織作りが必要。団内の安全組織として、安全担当者会議や装備点検。保護者や地域との連携が必要。

〔自己評価〕VSの場合、道自己評価させるかとともに、保護者とインストラクターの協力が安全でも必要だ。

§ 15 隊への支援 10:00～

成人の関与、団、他隊、地域の関与。地区にはコミやトレーナーもいる。

・支援をしてもらいたいこと、誰にどう支援してもらうかを、班ごとに話し合った。

〔自己評価〕具体的な支援が必要な状況になるよう、スカウトを活性化させるための支援が必要だ。

§ 16 指導者の役割と責務 10:45～

スカウティングは、青少年の発達に貢献することを目的とする運動。隊長の役割は、個人としても、肉体的にも、精神的にも、健康な社会人になるよう、成長を支援する。

隊長の責務は、成長過程にあわせた安全教育をするが、プログラムでは一緒に活動しない。

企画はその場で書かせる。scoutingはouting。

・隊長として、既に持っているモノと不足しているモノを書き出した。

○不足しているモノ

VS隊指導者としての経験、その年代のスカウトとの対話、RS世代との共感、彼らから引き出す手法の引き出し

BS、VS指導者としての保護者との関わりの経験

VS年代が関心を持つことに対するさまざまなインスト的存在

後継者の育成の経験

大事故の経験、経験者からの体験の共有

特にBS部門以上での地区や他団との協働経験

アドベンチャー系のスキルやそのポイントを評価するレベル

登山や移動キャンプのスキルある指導者からスカウト共に教わる経験

その年代なりの役割分担の指導法

〔自己評価〕不足しているものをすらすら具体的に書けるようになったことが進歩である。

〔生活面の感想〕サイトは、乾燥という面でマイナスはあったが、それ以外は文句なし。

〔班や担当所員の感想〕良いチームで気持ちよく過ごせた。若者たちとのコミュニケーションが楽しかった。一方で、彼らにとっての指導者との関係にちょっと感じるがあった。担当所員の関わり方が、VSらしかった。

〔コース全体の感想〕他県連での研修は、新たな発見があった。自県でも、何人からは県外産かがあると交流ができて良いと思った。

〔班担当所員のコメント〕4日間、お疲れ様でした。静岡県連と神奈川県連の違いもあるかと思いますが、原隊に帰り、うまく消化してください。新聞記事、楽しく読ませてもらいました。ありがとうございました。

●撤営

弁当の昼食後、撤営についての説明。14:20までに撤営の指示。工作物が多く、手順も良くなかったので、20分、遅れる。途中までは、所員があおりに来ていたが、途中で間に合わないとおきめられた。想像するに、キツツキ班を最優秀班に想定していたが、最後に遅れたので優秀班にならなかったのではないかと、悔し紛れに思っている。

撤営時に、急いでコンパネの上に竹材などを載せて運ぶ際、溝の橋を踏み外して腿の上にコンパネを落とした。打撲で済んだのは幸い。急ぐと危ない。

●閉所式

全体の点検講評で、最初に最優秀班として、ふくろう班が表彰された。班長次長の解任、各班の解と隊旗の返納と隊長、副長の解任を経て、修了証とウオグルの授与、所員との握手と、全員で輪になって手をつないでの歌を歌う。ここではお約束通り、泣いてしまう。

解散の後、所長と隊長、班担当所員で、班サイトで記念撮影。森田君に、三島駅まで車で送ってもらう。



【気付いたこと、思いついたこと】

- ・ベンチャー年代やGB向けのワークショップやファシリテーション講座を
- ・スカウトが好きな本や雑誌、新聞などから拾い出して、「関心があること」をK J法的に拾い出しワークショップ
- ・リーダーや保護者に対して「こうして欲しいこと」「やめて欲しいこと」「どんな大人になりたいか」を書き出してもらう
- ・おきての具体的な活動を出し合うK J法ワークショップ（BSだとGB？ VS年代）
- ・VSの議長役にRSがなってもいい。
- ・指示事項を細かく言うのではなく、「雨が降るかも知れないので、そなえのつねにの精神でサイト内を整備しておく」とか、おきての何番かを使う言い方をする。
- ・おきて唱和は、8つ言うのではなく、スカウトの好きなもの（できていないもの）を一つ、言わせる。
- ・安全対策としての掃除点検と、そのプログラム化
- ・VS年代の保護者との関わりのために、保護者が手伝わねばできないようなプログラムの実施（BSとの合同での50キロハイクのポイント支援）とか、スカウトの自宅訪問（「近づくに来たのでついでに」など。
- ・ちかいの再確認は、なぜ再確認をするかの意味をきちんと伝えてさせることが重要。
- ・ニーズを引き出すなどと言わず、96団バンドを結成することで、プロジェクト化するきっかけができれば。

プチ・アイデア

- ・表彰用の黒いお盆があるとセレモニーが締まる

- ・ 96 団のリーダーの服装チェックが必要（パンダバッジなど）
- ・ V S のチャット会議は導入できる。

ウッドバッジ研修所事前課題

横浜南央地区横浜第 96 団カブ隊 隊長

中川 和之

課題 1

日本連盟発行書籍「基本原則」および当該隊「隊長（リーダー）ハンドブック」を熟読してください。

※「隊長（リーダー）ハンドブック」は、特に、隊長の役割と当該隊のプログラムの企画および展開に関して熟読すること。

ベンチャー過程においては、ボーイ隊の活動と異なり、隊や班活動がメインではないため、スカウティングの手法である班制度と進歩制度をそのまま導入するのではなく、スカウト個々人の成長過程に応じたきめ細かい指導がポイントであると感じた。

プロジェクトアワードへの指導は、スカウト個人と対話をしながら、団内外の成人の支援を受けて行っていけばよいように考える。良く言われるPDCAサイクルは、まさに進歩制度そのものだが、ベンチャースカウトの場合は、プロジェクトなど大きな取り組みの中で、小さいステップを踏んでいしながら、自己や第三者評価（チェック）を重ねていくことが大切だと感じる。

一方で、隊やチームとしての活動をどう進めるかが、容易ではないようだ。この年代は、一人一人の自立度が異なるため、班制度のポイントである適切な役割分担やリーダーシップ、フォロワーシップを、固定的でない活動チームの中で身につけていくことができれば有効だろう。

カブやボーイ年代で、どのような体験を重ねてきたのかも踏まえておくことも大事だと感じた。特に、計画書や報告書など、書くことやまとめることに対して、負担を感じずに取り組めるようになっていくことが求められる。

課題 2

あなたが今まで指導者としてスカウト活動にどのように関わってきたか、また今後どの様に関わるかを身近なコミッショナー（団担当・地区・県連コミッショナー）と話し合い、話し合ったことを簡単にまとめてください。

カブからシニアまでスカウト経験があったため、娘と息子が入隊した後、活動の手伝いをするようになり、数カ月後に指導者講習会に参加した。その場で、指導者としてのスカウティングを初めて学び、長年の疑問が氷解。カブ隊デンリーダーや副長として活動することになった。98年から4年間の神戸勤務時代も、カブ隊副長（うち2年半はボーイ副長兼務）として活動し、カブとボーイ課程の研修所に参加。横浜に戻って3年余の副長時代にカブ部門の実修所に行き、隊長になって3年目となる。

カブ隊指導者として、スカウトの人数も増やし、他のリーダーとの協働を意識し、保護者の関わりも増やし、後任のリーダーにプログラム作りを徐々に任せられるようになってきた。今後は、団内のリーダー交替などの中で、ベンチャー隊かボーイ隊の指導者となる

ことを考え、今回の研修所に参加することにした。

ベンチャーという大人に近づくこの年代にとって、社会に面白いことがたくさんあるなかで、スカウト活動をどう面白く思わせるか。クラブ活動やバイトがあるなかで、できるだけ参加できる機会を増やし、海外も含めたさまざまな活動の舞台を提供できるように支援したい。一方で、スカウトのニーズをあまり先回りしてしまわないよう、自分で考えた結果としての行動を実感させたい。また、計画書や報告書を書きやすくする工夫もして、PDCAをうまく回せるようにしたい。

今後、活動するのが、ベンチャー隊かボーイ隊かは未定だが、いずれの部門で活動するにしろ、今回の研修所での学びは重要であると考えます。

課題3

課題1、2をもとに研修所で学習したいことを列記してください。

ボーイ隊の活動とどう連携すればいいか。GB会議への支援など、具体的手法を知りたい。その中で、ベンチャー隊への上進者をどう増やせばよいかを知りたい。

個人プロジェクト以外の、隊や活動チームのプログラムをどう組み立てていけばいいか。具体的な事例を知りたい。

部活などで活動に出てこられないスカウトを、どう巻き込んでいくか。RSや成人指導者へのつなぐ年齢としてのベンチャーをどう位置づけていくのかを学びたい。

この年代の保護者に、どうかかわってもらえるのかも知りたい。